

災害に備える

連載③

地震や台風などの自然災害が発生すると、多くのけが人が出たり、建物が倒壊したりする恐れがあります。被害を最小限にするために、町民の皆さん一人一人の日々の防災・減災への取り組みが重要です。普段からの備えや、災害が発生したときにどのように行動したらよいかを、シリーズで紹介しています。

最終回の今回は、災害時に救助する立場である消防士をクローズアップします。また、災害関連の本などを紹介します。

岡総務課地域安全対策係 ☎028(677)6029



あらい・かずあき ●昭和50年生まれ
平成8年芳賀広域消防にて消防士を拝命、茂木分署に配属。芳賀郡内の各分署で消防隊・救急隊として勤務後、真岡消防署特別救助隊や消防本部通信指令課を経験し、平成27年4月から芳賀分署警防第2係長として勤務。



PICK UP①

消防士に聞く――これからの防災・減災

警防第2係長 **荒井一明**さん（真岡消防署芳賀分署）

消防士歴21年目、芳賀広域の各分署や通信指令課などを経験し、今は消防隊として芳賀分署に勤務している荒井さん。今回は消防士の視点から「災害に備える」をテーマにお話を伺いました。

――災害での消防士の役割
災害が起きたとき、わたしたち消防士が最優先するのは、人命の安全確保を図り被害を更に拡大させないための消火活動です。

東日本大震災のような大災害が発生したときは、かなりの

の数の通報があります。しかし、芳賀分署には消防車と救急車が1台ずつしかないため、直ちに現場へは行けません。ですが、通報があった現場には時間がかかっても必ず確認に向かいます。被害の大きさは電話では判断がつかないからです。

――「自助」の重要性

防災と言うと、「自助」「共助」「公助」という言葉を聞いたことがある人も多いのではないだろうか。簡単に言うと、自分で自分を助けること

Ⅱ「自助」、家族・企業や地域で共に助け合うことⅡ「共助」、行政による救助・支援のことⅡ「公助」です。

防災の基本となるのは「自助」です。それは、自分が無事であるからこそ家族や友人・隣人などを助けに行くことができる。つまり、「共助」

とは一人一人が自分の身の安全を守ることができたことを前提として成り立っているのです。

「自助」に取り組むためには、災害に備え、家の安全対策を取っておくことが必要です。家のまわりを点検したり、家族で避難場所や経路を確認したり、非常持出袋や備蓄食料を準備したりと対策をしておくことが大切です。

また、東日本大震災では「公助の限界」が明らかになりました。これは、行政自身も被災して機能がまひするような大規模災害時に、公助の主体である行政が全ての被災者を迅速に支援できない状況に陥る可能性があるということです。

このようなことから、発災後3日～1週間程度は、行政の支援を受けることなく、住民主体で災害に対応しなければならぬということが明白となったのです。身の安全を確保し生き延びるためには、町

民の皆さんの「備える」が重要なのです。

――地域「コミュニティ」力を高めることで成り立つ「共助」

防災の基本は「自助」と話しましたが、自分でできることには限界があります。阪神・淡路大震災で生き埋めになった人が、誰に助けられたかというアンケートを取ったところ、約60%が家族や友人・隣人だったそうです。

わたしたち消防士は、日々訓練を積んでいますが、大規模災害が発生し救助対象者が多すぎると、全てに対応はできません。「共助」によってた

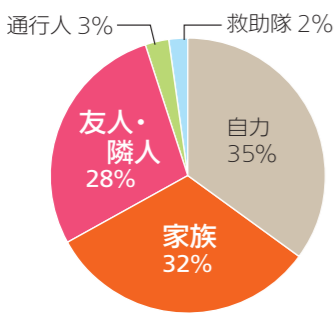
くさんの人が助かるのです。地域で助け合う「共助」を成り立たせるためには、日頃から近隣の人に声をかけるなどしてコミュニティケーションをとることが重要です。

――地域「コミュニティ」単位で防災を考える

自治会など小さな地域コミュニティ単位で、災害時の助け合い体制について話し合ってみてください。何も大々的に防災訓練を実施しなくてもいいわけではありません。例えば、地域のお祭りやイベントの一部に防災訓練を盛り込むのもひとつの手



阪神・淡路大震災時に生き埋めになった人は、誰に助けられたか？



【出典元】日本火災学会「1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」

